

はじめに

光陰矢のごとしである。

昨年3月、本誌の“はじめに”を執筆してから、はや1年が経過した。本会も長いトンネルを抜けて陽光さし込む広野に躍り出てきた感がある。

長年沈滞気味であった業績も活性化しつつある。活性化というキーワードは私が就任時に掲げたものである。役職員一体となり健(検)診業務、診療業務、研究ならびに講演などに顕著な功績をあげた。

健診領域では、地域、学校、職域ともに受診者の増加を見た。特に職域の増加は著しい。これに伴い診療実績も増加してきた。研究では、肺がん検診に関する分野、子宮頸がん検診の精度管理、および乳がん検診におけるトップランナーとしての位置づけが確立されつつある。医師の活躍は学会報告、講演などで、特に上記3分野において顕著である。

しかし、特筆すべきはコ・メディカルの活躍である。年1回、予防医学事業中央会の予防医学技術研究会議が開催される。私は今年初めて参画した。その内容は極めて専門性が高い。

たとえば小児スクリーニングからは先天性代謝異常の発見とそれに伴う日常の管理を聴講した。「マターナルPKUに関する検査センターの役割」という演題である。フェニルアラニンの大部分はチロシンに変換される。この変換触媒酵素はフェニルアラニン水酸化酵素である。これが遺伝的先天性酵素欠損によりフェニルアラニンが異常に体内に蓄積する。この蓄積は放置すると知能障害などを惹起する。また成人期にフェニルアラニンが高い状態で妊娠すると、高頻度に胎児障害を発症する。

本会では3例のマターナルPKUを経験し、専門の医療機関と連携してフェニルアラニン制限食で管理することで、無事それぞれ正常児として発育し、成人して妊娠した際にも正常分娩に導いた。このことは医学的にも社会的にもきわめて意義深いことである。

これは予防医学技術研究会議の一端であるが、本会からの多数の演題はそれぞれに質が高い。これも伝統であろう。医師、技師ならびに職員がコラボしてレーション活性化に立ち向かった結果、よい兆候がみられ始めたことは望外の喜びである。

2017年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
理事長 小野良樹